沖縄県立博物館紀要（Bull. Okinawa Pref. Mus.），No.30, pp. 37－42, 2004

資料紹介：殷元良の絵画資料

津波古　聰※

Material Note: In-genryou Work of Art in Okinawa Prefectural Museum

Satoshi TSUHAKO※

はじめに

琉球藩の絵師であった長嶺華国（1852～1932）は廃藩置県後に「琉球画人一覧」をつくり、それを末吉安久が時代背景を加え、沖縄タイムス紙上に「琉球画人伝」として発表した。華国の画人一覧は、明清時代の中国画風を中心としたもので、この一覧には、職業絵師いわゆる貝摺奉行所の絵師は除いたとした。鎌倉芳太郎は、この画人一覧に対して家譜中心で、口伝をそのまま加えた部分もあって調査の必要がある。さらに時代分類の統一性を欠いているため、史料的価値はかならずしも正確ではなく、総体的に画人一覧は、中国的理論の見方であって、琉球絵画史の正流から画人の選択をすべきとした。

琉球国の工芸品や各建造物等に参加しながらその全体像があまりはっきりしないのが絵師である。鎌倉氏が指摘したように「画人一覧」や「琉球歴代画家譜」及び口伝などすべて整理する必要性があるのはいうまでもない。

さて、そのまえに当博物館の絵画資料を少しずつ検証していきたい。そのなかで先の問題点なども含め「琉球絵画」を考えていければ幸いに思う。

今回は琉球の絵画史のなかでも代表的な絵師・殷元良の作品を紹介したい。当博物館には「雪中雉子の図」・「花鳥図」・「竹の図」・「古柳水禽の図」以上４点の作品を収蔵しており、「古柳水禽の図」以外は、県の有形文化財に指定されている。

琉球国における絵師は、自了（城間清豊）から長嶺華国までの約200年間に57名の名前が確認された。57名のなかには教養のひとつとして手がけた者もおり、いわゆる絵師ではない者も含んでいる。そのなかで公式な絵師（貝摺奉行所に所属した絵師）は20名少々であった。また、殷元良（座間味庸昌）、向元瑚（小橋川朝安）、毛長禧（佐渡山安健）らは貝摺奉行所には配属されてなく、王府直属の絵師の性格をもち、近習役や間切の惣地頭職などを務めている。彼らを加えても23名である。殷元良はそのなかでも特に優遇されていた絵師である。当時の国師・蔡温から「朝廷の一器」との意味をもつという「廷器」という字を賜っている。さらに国王より「中山首里」、「殷元良印」、「廷器氏」の三面の印を賜う。このことから殷元良に対する王府の処遇がかなりのものであったことが容易に想像できる。その後の王府は他の絵師に対して彼以上に処遇することはなかった。

琉球国の絵師は、中国や日本から画技を学び、発達していった。絵画制作の開始は遅く、17世紀の自了に始まり、李基昌（崎山喜俊）が薩摩藩の絵師に絵を学ぶことから技術導入が行われ、多くは中国に渡航し絵画の習得に努めている。この絵師留学も呉師虔（山口宗季）以降なくなり、呉着温（屋慶名政賀）が1773年自費で中国に渡ったのが最後となる。しかも絵の稽古のためであったが、具体的に誰それに師事したという記録はなく、結局絵の見本帳を購入しただけである。中国へは、殷元良、向元瑚らも渡航しているが、絵師として活動した記録はない。したがって、王府がおこなった絵師の中国派遣は、呉師虔で一応終わることになる。

最後の中国留学生となった呉師虔は、福州において孫億、順梁享、鄭大観らのもと画技の勉学に励み、確実に福州の画風（写生体院体画）を修得し帰国し

※　〒903-0823　那覇市首里大中町1-1　沖縄県立博物館
Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

た。しばらくして呉師虔は、王府の命により12歳の少年に絵の手ほどきをする。この少年が殷元良であり、王府の期待を一身に集めた絵師であった。王府が殷元良を貝摺奉行所以外の絵師にしたことは、琉球の絵画史において要的位置づけとして考えられ、もっと注目してもいい人物ではなかろうか。

殷元良の略歴

さて、殷元良は1718年12月21日に仲松里之主親雲上庸象と眞満夫婦の次男として生まれる。6、7才のころより絵を描き始めていくが、父庸象は、絵より字を習うようにと叱りつけたが、それでも習字の合間に密かに絵を描き続けた。7、8才ころその絵の評判は各地方まで届くようになったという。1729年（雍正7）、王府は呉師虔に殷元良の絵の教師としての役目を与える。殷元良は、王府の期待にそうよう勉学に励んだのであろう。ついには国師・蔡温より、「廷器」の字を賜い、尚敬王より印三面を賜うようになった。1733年（雍正11）絵画の修練の業績に対して若里主の位を叙され、元服を迎え、1737年（乾隆2）向氏松村親雲上朝英の娘思戸と結婚、その後三男二女を授かる。殷元良は儀式のたびに聞得大君や王妃から御玉貫等を賜っている。まさに「朝廷の器」にふさわしい待遇である。1752年（乾隆17）に大筆者として中国へ進貢する。1754年（乾隆19）10月、円覚寺に奉納する尚敬王御後絵の製作にはいり、11月に完成する。1767年（乾隆32）に死去、享年50才。このときも国王より御香5本、御玉貫一双等、また毛氏聞得大君加那志、馬氏佐敷按司加那志らから米などが下賜された。以上、殷元良の簡単な略歴である。

彼の記録は、比嘉朝健が著した「琉球歴代画家譜・上」（『美術研究』、1936）にくわしい。家譜を見ると作品制作の記録は、元服後に記録される内間御殿にあった石碑の鳳凰の図柄を手がけ、その後尚敬王の御後絵を製作するが、この2件のみである。殷元良の略歴のなかで、1752年の中国への渡航は、特に注目したいところであるが絵師としての動きはみえない。しかし大陸から何らかの影響を受けたことは容易に想像できるであろう。1752年以降の現存する作品は3点（山水図2点、竹の図1点）あるが、これら作品からの検討が必要と思われるが、作品数が少ないため、次の機会に検証したい。

なお、戦前鎌倉芳太郎が調査し、写真に撮った尚敬王の御後絵は、1796年に向元瑚が模写したものである。

殷元良の作品

殷元良の作品は、落款印章があきらかな作品を、刊行されている図録等から抜き出した。実物がなくとも写真等で記録されたものも含め、リストにあげた。それが別表の20点の作品である。その他に殷元良の作品を模写したとされるもの1点、殷元良の作品として伝えられるものが2点であった。20点のうち6点は実物がなく、写真のみの作品である。写真2点は鎌倉芳太郎が戦前調査したもので、『沖縄文化の遺宝』掲載されている。残りの4点は未公開の写真で、当博物館に収蔵されている。（後日、鎌倉芳太郎氏撮影で、沖縄県立芸術大学にも所蔵されていることがわかった）

殷元良の作品を模写した作品「琉球国図」は、名古屋の西尾市立図書館岩瀬文庫蔵で、那覇港と首里城を俯瞰的に描いたものである。類似の資料として「首里那覇港図」あるいは「琉球国貿易図」と称される屏風の構図に近い。ちなみに最近、同種の屏風絵に関する文章等が散見され、研究が進められているようである。

伝殷元良の作品は、「神猫の図」である。もともと首里城に収蔵されていたが、尚順氏が爵位を授かった際の祝儀として尚泰侯より贈られたものである。残念ながら絵は現存せず写真のみの資料である。この絵を実見し、写真撮影を行った鎌倉氏は、三省堂の図と類似点は見いだせるが、誰の筆か不明なりとし、後日三省堂にて殷元良の猫図を見ている。確かに殷元良は、猫をテーマとした作品を描いているが、尚順氏蔵の「神猫の図」ではないようである。類似品として呉師虔作の「神猫の図」（那覇市所蔵）が現存している。伝殷元良の「神猫の図」は、画面の左下に印影が二つほど確認できるが、解読不明である。また署名などなく、作者を特定すべき材料は画面から得ることはできない。それでも伝殷元良としたのは、首里城に収蔵されていたころから殷元良作として伝わっていること、過去の琉球の絵画関係論文等において、作品のできと琉球歴代画家を比較し

たところ殷元良以外に描けることができる絵師はいないとの見識であった。したがって、殷元良作とする材料はあやふやなので、「神猫の図」はリストより省いてある。

画題は山水・６点、花鳥図等・４点、人物等・４点、鶉・３点、竹や梅等静物・３点である。山水の６点は夏秋冬の季節をテーマにした作品と思われる。人物等のうち２点は「普化来迎図」で修行僧が鈴を手に天上より降りてくる姿を描いたものである。戦前比嘉景常が著した『久米島紀行』に紹介されている。

昭和12年、美術教師・比嘉景常は、一中入試の監督のため久米島に渡るが、このときの久米島の印象を『久米島紀行』にまとめ同年の琉球新報紙上に連載した。比嘉は試験の終わった２月13日に上江洲知元氏の親類にあたる屋号内間前宅（与世盛家）において「普化来迎図」を知る。その後、絵はハワイに渡り、一時当博物館に寄託されていたが、現在個人が所蔵している。

一方類似の作品は写真が残されていて、月□（湛か？）叟の賛が見える。久米島にあったものは賛がなく、筆致も若干異なるが、ほぼ同じ構図である。このモノクロ写真は那覇久茂地町在の佐久川兼栄蔵（縦84.7×横38.3）の作品を撮したものと思われる。写真は当博物館にあり、写真の状態からみて師範学校の郷土資料室にあったものと推測され、鎌倉芳太郎が撮影したものと思われる。同名の作品が過去に２点あったことになり、殷元良の人物図を研究するうえで参考になる資料であろう。なお、本作品が与世盛家にあった経緯は記録がなく不明である。

琉球の絵画がどのくらい現存しているのか定かではないが、絵師の人数と比較すると、多いとは言えない。殷元良の作品20点も決して多いとは言えないが、沖縄戦のことを思うと琉球王国を代表する絵師の作品がこれだけ現存することは幸いといえる。
以下、当博物館に収蔵されている４点について紹介する。

１）紙本着色「雪中雉子の図」　一幅
縦143.7cm×横67.2cm

画面構成は、雪を被る木と岩で画面を斜めに分け、岩につがいの雉子を描く。その下に朱色の牡丹を配置し、絵の中心となるつがいの雉子を飾りたてる。雪の描写は、周辺の空間を塗りつぶすことによって白抜きで表しており、紙の地色を利用している。別名「雪景花鳥図」とも呼ばれている。他の作品と比べると技巧的すぎるとの意見もあるが、もともと模写であるため、原本を忠実に写しとった結果である。中国の院体画の影響が強いように思えるが、この画風はたして殷元良本来のものかどうか疑問である。戦前は屋慶名政方家蔵のもので、戦後、当博物館が遺族より入手している。

この作品のもと絵は中国の絵師・章聲作「雪中花鳥図」（縦５尺８寸７分横３尺１寸６分）という。戦前は尚侯爵家が収蔵していたが、現在は不明。殷元良の作品と比べ、陰影等の細部が異なる程度で、つがいの雉子、老木、牡丹、草の配置、彩色等はほぼ同じである。章聲（生没年不詳、18世紀）は、字・子鶴、浙江仁和出身で、父章谷の画法を受け継ぎ、山水花卉にすぐれた絵師といわれている。

２）絹本着色「花鳥図」　１幅
縦98.7cm×横42.7cm

画面構成は、笹や牡丹とともに梅の枝が画面の上下にのびるように描かれ、笹の一枝に鳥が一羽止まっている。梅の枝の描写は鋭く、空間を切りとるようにのびている。画面の斜めの方向に枝を置き、画面中央付近に鳥を配置している。

構図は、可もなく不可もなく、バランスがとれている作品である。鳥や梅等の描写は細かく、その技術に感嘆するが、逆に動きが押さえ込まれているように思える。

この作品を模写した絵師がいる。貝摺奉行所に所属していた呉着温（1737～1800、後に呉着仁に改名）である。呉着温の「花鳥図」（個人蔵）は、左右逆に描写したもので、木立や鳥、花など忠実に模写している。（『未公開作品による琉球王朝の書画』平成４年、古美観宝堂を参照）呉着温は貝摺奉行所に勤めていたころ殷元良に師事しているので、師である殷元良の作品を模写したのであろう。

３）紙本墨画「竹の図」　１幅
縦101.7cm×横45.4cm
制作年：1762年（乾隆27）

大湖石と竹を描いたものであるが、奥にみえる竹の墨は手前より少し薄く、奥行きを出し、静かな情景を描いたものである。竹の根元に見える岩は竹の鋭さとは逆に柔らかな墨で描き、その対比をねらっている。画面の上半分を占めている竹の葉は、中央から蛇行しながら上に配置し、最後は空間を囲うかのように下に垂れさがっている。殷元良晩年の作である。本作品は沖縄の歴史家・東恩納寛惇氏より寄贈されたものである。

4）絹本着色「古柳水禽図」　　1幅
縦100.0×横47.8

画面の構成は、右手より枝がのび、その先に牡丹の花が咲く。牡丹の花は画面ほぼ中央に位置する。牡丹と右下角への線上に鳥一羽が水面をのぞく。

鳥は小さくても牡丹が誘いとなって自然と目にはいる。鳥は水中の藻がゆらめく様子をのぞく。画面のところどころに見所を置きながら、上部の柳で空間を閉じこめる構成は、無難である。「花鳥図」と本作品を比べると鳥や木、花等の描写は、共通な部分が多く見られ、お手本的な描き方である。水中の藻などは技巧的に感じられる。

以上、4点の作品を簡単に紹介したが、「竹の図」以外の3作品は、花鳥を題材にしたもので、鳥、花、木、岩を組み合わせた作品である。画面の大きさは「雪中雉子の図」が大きく、その他の作品は、ほぼ同じ寸法である。画面構成を見てみると絵の中心となる材料を画面中央より下あたりに描く。そこを中心に対角線上に各材料を配置して、バランスをとっている。ただ、正直に線上にあるため、被写体の動きを止めてしまう描写になっている。筆は「雪中雉子の図」の木が柔らかく緩やかな筆使いに対して「花鳥図」、「古柳水禽図」の木は堅めの勢いのある線で描いている。「雪中雉子の図」は雪を表現するため柔らかく緩やかな筆使いであるが、「花鳥図」と「古柳水禽図」に見られる木は完全に同じ描写である。　殷元良の筆使いは、墨を多めに含ませ、勢いよく走らせる。墨色を変えてもその動きは同じである。竹の図に見られるような岩のたっぷりとした墨使いは、他の作品には見られない。また、岩は輪郭と岩肌の一部を少し斜めに走らせるが、岩全面にわたり描写することはない。上から下へ走る岩肌の表現は呉着温の作品にも見られる。墨の上に青の色を配置する点苔も殷元良や呉着温の作品によく見られるものである。花や木の表現に対し、鳥は雉子であろうが、ウグイスであろうがその目は鋭い。ピッと張った尾ときれいに胴部にまとめた羽の美しさ、これが獲物をねらうかのような目によって緊張感をだしている。鳥の描写は、呉着温であろうと模写できず、殷元良ほどの鋭さはない。

おわりに

琉球の絵画の変遷を①1600年代の絵画技術の導入、②琉球の絵画の創設期、③文人画や風俗画など画風の多様化へと大きく三つに分けられると思う。そのなかで王府は殷元良を優遇し、貝摺奉行所の絵師と区別し、別扱いにした。その真意は不明であるが、小さいながらもアカデミックな体制を形作ろうとしたのではないかと推測される。

今回、当博物館収蔵の絵画資料を紹介し、研究材料に利用できないかという目的で記述したが、久しぶりに殷元良の作品を眺めているとき、ふと思った疑問点と収集していた殷元良の資料等を紹介しながら、この拙文を思いつくまま記してみた。

参考文献

比嘉朝健「琉球歴代画家譜　下」（『美術研究第48号』昭和10年）

鎌倉芳太郎「第1章首里王府画人伝及び貝摺奉行所絵師系譜一首里王府画人」（『沖縄文化の遺宝』岩波書店、昭和57年）

林　進「第四章　琉球絵画研究　宗季『花鳥図』ー近世写生画の魁」「附論琉球宮廷絵師　座間味庸昌」（『日本絵画の図像学的研究』、八木書店、平成12）

比嘉朝健「清朝御物尚侯爵家の章聲筆雪中花鳥圖に就いて」（『塔影』塔影社、昭和12）

『未公開作品による琉球王朝の書画』（編集発行・古美術観宝堂、平成4年）

殷元良作品一覧

	作品名	数量	制作年	形態	法量	署名	印章	所蔵先
1	花鳥図	一幅	18c	絹本着色掛幅装	98.7×43.7	中山首里殷元良	殷元良印(朱文)、廷器氏(白文)	沖縄県立博物館
2	竹の図	一幅	1763年	紙本墨画掛幅装	101.7×45.5	壬午孟夏中山殷元良	殷元良印(朱文)、廷器氏(白文)	沖縄県立博物館
3	雪中雉子の図	一幅	18c	絹本着色掛幅装	143.7×67.2	中山首里殷元良	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)	沖縄県立博物館
4	枯柳水禽之図	一幅	18c	絹本着色掛幅装	100.0×47.6	中山首里殷元良	殷元良印(朱文)、廷器氏(白文)	沖縄県立博物館
5	船上武人図	一幅	18c	紙本着色掛幅装	96.7×41.5	球陽殷元良	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	大和文華館
6	寿老人	一幅	18c	紙本着色掛幅装	111.0×47.3	中山首里殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	個人蔵
7	山水図	一幅	1754年	絹本墨画掛幅装	104.0×39.9	甲戌仲春球陽殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	個人蔵
8	山水図	一幅	1748年	紙本墨画掛幅装	84.6×43.7	戊辰仲夏球陽殷元良	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)	ドイツ・バーデンブェルテンベルク州国立民族学博物館
9	山水図	一幅	18c	紙本墨画掛幅装	126.4×58.0	中山殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	東京国立博物館
10	鶉図	一幅	1748年	絹本着色掛幅装	86.0×40.4	乾隆十三年歳在戊辰立春之前球陽首里殷元良	三顆	大倉集古館
11	山水図	一幅	1753年	紙本着色掛幅装	94.9×43.4	乾隆拾捌年癸酉孟夏球陽首里殷元良寫	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	正木美術館
12	白梅牡丹図(仮称)	一幅	18c	絹本着色掛幅装		球陽首里殷元良	三顆	個人蔵
13	雪景山水図	一幅	18c	紙本墨画掛幅装	110.0×48.6	殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	個人蔵
14	普化来迎図	一幅	18c	紙本墨画掛幅装	89.0×38.4	琉球中山首里殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	個人蔵
15	普化禅図	一枚		モノクロ写真(掛幅装)		殷元良	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)	(佐久川兼栄旧蔵)
16	花鳥図	一枚		モノクロ写真(掛幅装)		倣(聞)之□殷元良		
17	栗鶉図	一枚		モノクロ写真(掛幅装)			(印章のみ)	(豊見城朝熙旧蔵)
18	粟鶉図	一枚		モノクロ写真(掛幅装)		中山首里殷元良	中山首里(白文)、殷元良印(朱文)、廷器氏(白文)	
19	夏景山水図	一枚	1750年	モノクロ写真(掛幅装)		庚午秋球陽首里殷元良寫	朱印三顆	(尚順男爵旧蔵)
20	白梅図	一枚		モノクロ写真(掛幅装)		殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	

凡例：1、殷元良の作品は、各所蔵先の図録等から収拾したものである。
2、個人の作品については、諸般の事情により個人蔵とした。
3、モノクロ写真（No15～20）は、すべて当博物館蔵である。
4、モノクロ写真は、その後の調査で沖縄県立芸術大学蔵の鎌倉芳太郎資料に含まれていたことが確認された。
5、所蔵先の（　）は、戦前の所有者。
6、モノクロ写真の作品は、現在のところ消息不明。

1）「雪中雉子の図」

3）「竹の図」

2）「花鳥図」

4）「古柳水禽図」